主体性を育む「実の場」

校長　小髙　敏男

大泉小学校では、「主体的に学び合う児童の育成」を柱に日々の教育活動を行っています。その成果は、様々な場面で見られています。先日の避難訓練では、予告なしでも火災の想定だと分かると自分からハンカチを出して口に当て、校庭への非難が完了しても次の判断のために話をしないでみんながシーンと待っています。指示がなくても自分のやるべきことを考え判断して行動できる姿は、主体的な児童の姿そのものです。また「わくわくタイム」では、上の学年の児童が、下の学年の児童が楽しめるようにと、その場の状況で臨機応変に話を変えて場を盛り上げている姿や、戸惑っている児童に気付いて言葉を掛けたり一緒に行動したりしている姿が見られます。優しさと主体的に行動できる力が育っていることを感じて嬉しくなります。

主体的に学び合う児童を育てる教育のカギとなるのが、「実の場」だと私は考えています。「実の場」という言葉は聞きなれない方も多いと思いますが、簡単に言うと「実際の場」です。「実の場」の重要性は、卒業アルバムの文集にも表れます。卒業アルバムの文集には、移動教室や運動会などの行事を題材にしたものが多く書かれています。それは、忘れたくない思い出であったり、価値を強く感じていたりするからでしょう。それらの行事は、「実の場」での学びであると言えます。しかし、「実の場」であれば何でもよいということではありません。移動教室や運動会も、事前・事後の主体的な学習があって、より価値ある学びとなります。事前に自分たちがより良い行事にするためには何が必要なのかと考えて、ねらいをもち、主体的に取り組んだからこそ、価値ある行事となります。もし、受け身であったら不平不満も出てしまうでしょう。

では、各教科に「実の場」はあるのでしょうか。

体育科は、学習そのものが運動であり「実の場」とも言えますが、児童自身のやりたいと思う気持ちがなければ学びは少なくなります。「実の場」であっても、興味関心や学習の楽しさを十分に味わうことが重要なのです。また、教育では「活動あって学び無し」という言葉をよく聞きます。例えば、サッカー型の学習で、サッカーが好きな児童が、試合だけをして楽しんでいるとしたら、そこにどのような学びがあるのか疑問に思います。しかし、ゴールを決めるためにはどうしたらよいのか？チームワークを高めるにはどうしたらよいのか？など、自分たちの求める目標に向かって試行錯誤する活動があったらどうでしょうか。そこには学びが生まれていることが分かります。つまり、児童自身が願う、運動に合った目標をもつことが重要だということです。学習に興味関心をもち、学習そのものの楽しさを味わいながら、自己に適した目標を明確にもって活動することで、主体的な学びが実現するということになります。

国語科ではどうでしょうか。行事の際の代表児童の言葉などは、作文やスピーチの学習が「実の場」として生かされていることは分かりやすい例でしょう。国語科では、物語文や説明的文章も学習します。それらの学習では、教師は優れた叙述について考えをまとめたり要旨をとらえたりすることを指導のねらいとしますが、それに対して、児童は文章の内容のおもしろさに興味関心をもちます。教師のねらいと児童の興味関心に違いが生まれてしまうのです。その違いを一致させるためにも、「実の場」が役立ちます。例えば、児童が物語文を読んで「おもしろい」と感想をもったとします。そのおもしろさを「他の学年の友達に伝えるためにポップを作ろう」という「実の場」を設けると、ポップを作るために、物語文のおもしろさを詳しく読み深めなければならないという学ぶ必然性が生まれます。教師の学ばせたいねらいと児童の興味関心が一致する「実の場」を設定することで、学ぶ必然性や必要感が生まれ、主体的に学ぶ児童の姿が期待できます。

本校では、各教科の中、学校行事と教科学習等の関連の中、時には教科と教科を合わせた学習の中でも「実の場」を考え、児童の思いや教育効果を大切に、計画的に継続的に教育活動を行い、輝いた表情で生き生きと学ぶ主体的な児童の姿を求めてまいります。